

英語発音とその指導に対する大学生の意識調査

著者	伊藤 泰子
雑誌名	言語教育研究
号	32
ページ	1-23
発行年	2021-11
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001823/

英語発音とその指導に対する大学生の意識調査

伊藤 泰子

要 旨

本研究では、英語発音に特化した 2 つの授業において、指導を通して履修者の英語発音に対する意識がどのように変化するかを探ることを目的としている。集団での指導では全体的な傾向をつかみ、個別での指導では履修者ごとに意識の変化を見て、さらにそれが実際の発音の変化に結び付いているのかも調査した。

その結果、集団での指導では指導前と指導後とで意識の変化が見られ、主に母音と子音に関して指導が「役に立った」との回答が多かった。母音と子音の中でも特に短母音、長母音、二重母音において変化が顕著であった。また、個別指導では自身の発音の癖を認識し、その改善に努め、さらに実際に改善につながったことが確認できた。以上の結果から、指導を通して英語発音に対する意識に働きかけることが可能であり、さらに発音の改善にもつながることが確認できた。

1. はじめに

雑誌『英語教育』の 2005 年 12 月号では「発音・音声指導」の特集が組まれており、その中で小菅（2005）は「一般に英語の授業の中で、文法、語彙、読解などは重視されても、発音はあまり重きを置かれぬのが実情であろう」と述べている（p. 10）。それから 16 年あまり経った現在、状況は変化しただろうか。渡邊（2018）は、大学 1 年生を対象に、中学校と高校で授業中に定期的に発音指導があったかどうかを尋ねたところ、約半数の生徒が指導を受けたと回答した。一方、大塚・上田（2012）の大学 1 年生を対象としたアンケート調査によると、中学校と高校で発音記号の読み方をならったかどうかという質問に対し、中学校については約 3 割が肯定的な回答をし、高校に関しては半数以上が肯定的に答えている。さらに大塚・上

田（2012）は教員も対象に調査したところ、発音記号の読み方を指導するかという質問に対して、中学校教員は 4 割弱が、高校教員は 5 割強が肯定的という結果となった。これらの研究から、音声は授業の中で扱われつつあることがわかるが、まだ半数にとどまっている。

新学習指導要領では、「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」の 4 技能 5 領域を身に付けることが求められており（文部科学省、2017）、スピーキング力がさらに重要視されるようになった。発音は、スピーキングとリスニングのどちらにも大きく影響するため、発音を磨くことはそれらのスキルを伸ばすための一助になると言える。

しかし、学習者は発音に対してどのように感じているのだろうか。発音に対してどのような意識を持っているのか、さらに教員はそこに何かしらの働きかけができるのかなど、様々な疑問が生じる。そこで本研究では、英語の音声に特化した授業「英語音声学」と「英語オーラルインタープリテーション」の受講生を対象に、彼らの英語発音やその指導に対する意識を調査する。

2. 日本語を母語とする英語学習者の英語発音に対する意識

日本語を母語とする英語学習者にとって、語彙や文法に加え、音声も大きな壁となる。たとえば、母音を見てみると、日本語では母音が 5 個であるのに対し、英語では短母音と長母音だけでも 11 個ある（竹林・斎藤、2008）。母語である日本語では 5 個を区別すればいいが、目標言語の英語では 11 個を区別しなくてはいけない。また、臨界期仮説に関して、音声の習得の臨界期は他の言語的側面よりもさらに年齢が低くなるという主張もある（Gass, Behney, & Plonsky (2013) を参照）。このように音声に関して様々なハードルがある中で、英語音声の習得は困難であると感じる学習者も少なくない。中西（2008）は 461 名の高校生と大学生に英語発音学習に関するアンケート調査を実施したところ、8 割弱が自分の英語発音はネイティブスピーカー

の発音に近いと「思わない」あるいは「全く思わない」と回答した。このことから、日本語母語話者にとって英語の発音に対する苦手意識は決して低くないと言える。

また、中西によると 8 割の参加者がネイティブスピーカーの発音に近づけたいと「思う」または「非常に思う」と回答したことから、苦手意識はありつつも発音を改善したいという思いもあることが明らかとなった。では、そのような学習者に対して発音指導を行うことは効果的なのだろうか。木澤（2013）では中学生に対して明示的な発音指導を行い、ネイティブスピーカーによる評価をもとに発音指導の効果を報告している。また、牧野（2013）や柳田（2019）は、学習者の自己評価にもとづく発音指導の効果を報告している。学習者自身が効果的と判断できるか否かは、学習の動機付けにも影響するため、その効果が確認されていることは教育上有意義である。

以上のように、発音指導や学習に対して肯定的な姿勢を示す学習者がいる一方、中西（2008）ではネイティブスピーカーの発音に近づけたいと「思わない」または「全く思わない」と回答した参加者は非英語専攻グループで 27%、英語専攻グループで 5% いた。その詳細は不明であるが、篠崎（2015）では中学生を対象に、発音学習が大切だと思わない理由を尋ねたところ、「英語を使っている人はとても多く、人それぞれに訛りがあると思うから」「発音ができても文章を書くときに困るから」「身に付けるのが大変だから」「あまり外国人と話す機会が無いと思うから」といった回答が挙げられた（p. 69）。中西（2008）でネイティブスピーカーの発音に近づけたいと思わないと回答した学習者の中にもこのような理由を持つ学習者がいたかどうかは不明だが、発音学習に対して否定的な姿勢をもつ学習者がいることは把握しておかなくてはならない。

筆者は外国語教育を専門とする大学に所属しており、英語の音声に特化した授業である「英語音声学」と「英語オーラルインタープリテーション」を担当している。

1 学期間を通して英語発音を重点的に扱った授業を行っているが、小野（2012）でも述べられているような発音上の問題点が多く見られ、それらの矯正も目指しながら指導を行っている。学生の大半が英語を主専攻あるいは副専攻としているため、英語の発音に対して肯定的な姿勢をもっている学生は多いと推測されるが、中西（2008）にも見られるように、中にはそうでない学生もいる。そういった様々な学生を対象として英語発音を中心とした授業を展開する中で、発音学習や指導に対して学生はどのように感じているのかを明らかにすることが、本研究の大きな目的となる。

3. 本研究の目的

本研究の主な目的は、日本人大学生の英語発音やその指導に対する意識を調査することであり、具体的には以下の4つの研究課題を設定した。

1. 英語発音に関する指導を受けることで、音声に対する意識が変化するか？
2. 変化する場合、どのような項目に対して変化するか？
3. 英語発音に関する指導を通して、自身の発音に関する弱点を意識できるようになるのか？
4. 意識の変化だけでなく、発音も改善されるのか？

これらの研究課題に対する答えを見つけるために、2つの調査を実施した。まず研究課題の1と2に関しては、集団での発音指導を受けた学生について調査した。大人数を対象とした「英語音声学」の授業を通して、学生の英語発音とその指導に対する意識を調べた。研究課題の3と4については、個別の発音指導を受けた学生を対象として調査した。「英語オーラルインタープリテーション」の授業は少人数制の授業であり、年度によって変化はあるものの、10名前後の履修者を対象に発音の個別指導を実施している。以上のように集団指導と個別指導それぞれにおける調査

を実施することで、日本語を母語とする大学生の英語発音に対する意識を広く、さらに詳しくとらえることとした。なお、分析の対象とした「英語音声学」および「英語オーラルインタープリテーション」はどちらも、該当年度はZoomを利用したオンラインでの開講となった。

本稿では、集団指導と個別指導のそれぞれの調査方法と結果を別々に述べ、考察では2つの調査を合わせて上記の4つの研究課題について考えることとする。

4. 集団での発音指導を受けた学生の意識調査

この調査では、大人数を対象とする授業「英語音声学」を受講した学生が持つ発音とその指導に関する意識を調べることを目的としている。調査は年度をまたいで行っているが、その理由としては、2020年度に実施した調査においてつかんだ傾向をもとに、次の2021年度にさらに詳しい調査を行うためであった。年度ごとの調査の概要を述べる。

4. 1. 2020年度実施の調査

まず、2020年度に実施したアンケート調査では、「英語音声学」履修者の全体的な傾向をつかむことを目的とした。

4. 1. 1. 参加者

本調査の参加者は、2020年度後期に筆者の担当する「英語音声学」を履修した学生である。履修者数は102名だったが、母語が日本語ではない学生と、研究参加に同意しなかった学生を除いて95名からの回答を分析対象とした。1年生は30名、2年生は50名、3年生は12名、4年生は3名であった。また、87名が英語専攻で、8名が非英語専攻であった。

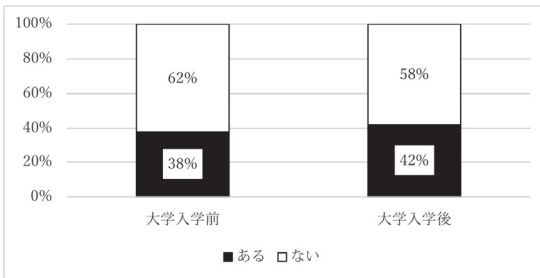
4. 1. 2. 調査材料

日本人大学生の発音に対する意識を調べるため、発音指導を受けた経験や指導前後の意識の変化などについてのアンケートを Google Form を使用して作成した。主な質問内容は、大学入学前と入学後に受けた発音指導や、「英語音声学」の受講前後での英語発音に対する意識の変化、また意識の変化があった場合に変化をもたらした活動や項目についてである（具体的な質問項目と回答方法は資料を参照）。アンケートは学期末に実施した。

4. 1. 3. 結果

まず、大学入学前と入学後の発音指導を受けた経験の有無についての結果を図 1 に示す。

図 1 英語発音に関する指導を受けた経験の有無



スピーキング力が重要視されるようになった現在でも、やはり発音に関して指導を受けた割合と受けていない割合を比べると、中学校や高校などの大学入学前でも入学後でも、受けていない割合が高いことがわかる。

次に、図 2 に「英語音声学」受講の前後での英語発音に対する意識の変化を示す。横軸の数字はリッカート尺度の 1 から 5 を表しており、1 が「まったく意識していな

かった」、5 が「いつも意識していた」を表す。また、データとして提示されている数値は、それぞれを選択した人数を表している。

図2 「英語音声学」履修前後での英語音声に対する意識

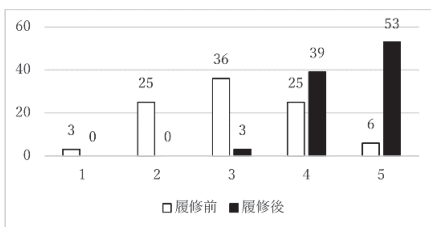
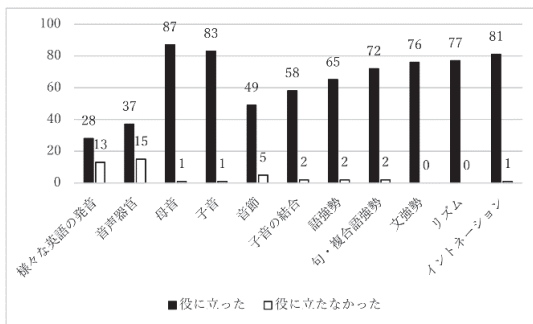


図2によると、履修前は回答が1から5に広がっていたが、履修後は3から5、主に4と5に回答が集中していることがわかる。授業を受講することで英語音声に対する意識が大きく変化したことがうかがえる。

図3では、授業で扱った項目の中で役に立ったと思うものと役に立たなかったと思うものを、複数回答可として選択してもらった結果を示す。

図3 授業で扱った項目に関して「役に立った」あるいは「役に立たなかった」と回答した人数



母音と子音、さらにイントネーションについて、95名中80名以上が「役に立った」と回答した。さらに、文強勢とリズムについては「役に立たなかった」と回答した人がゼロであったことも興味深い。

この結果を受けて、次年度の「英語音声学」では、母音と子音についてさらに詳しく見ることにした。

4. 2. 2021年度実施の調査

2020年度に実施した調査で、特に母音や子音についての指導が「役に立った」とする回答が多かった。そこで、2021年度の「英語音声学」では母音と子音に対する意識を詳しく調べるために、さらなるアンケート調査を行った。

4. 2. 1. 参加者

2021年度後期に担当した「英語音声学」の履修者は71名いたが、10回にわたる母音と子音に関して指導の直後に実施したアンケートすべてに回答した30名を分析対象とした。30名のうち、3年生は8名、2年生は17名、1年生は5名であった。また、25名は英語専攻で、5名が非英語専攻であった。

4. 2. 2. 調査材料

母音と子音に関する指導を行った直後に、それぞれの母音と子音について発音の感覚が「つかめた」か「つかめていない」かを尋ね、さらにこれまでの自分のそれぞれの母音や子音の発音が「正しかった」、「違っていた」、「正しかったか違っていかかわからない」のどれかも尋ねた。指導後について「できる」「できない」という言葉を使わなかったのは、このアンケートは授業直後に実施しており、その音の発音ができるようになるまでにはもっと練習が必要であると判断したためである。授業の目的は音の感覚をつかむことであり、その音の発音ができるようになるまでに

は各自でさらなる練習が必要である、と学生には伝えていた。母音や子音の分類については、授業の教科書として使用していた竹林・斎藤（2008）を参考とした。

4. 2. 3. 結果

個々の母音と子音について、これまでの自分のそれぞれの母音や子音の発音が「正しかった」、「違っていた」、「正しかったか違っていたかわからない」のいずれかの判断は指導前の自己評価として、また発音の感覚が「つかめた」か「つかめていない」かの判断は指導後の自己評価としてとらえ、それぞれの項目への回答を図4～7に示す。紙面の都合上、図の中では「○×△」という記号を使用しているが、「○」は指導前の「正しかった」という判断と指導後の「つかめた」を指し、「×」は指導前の「違っていた」と指導後の「つかめていない」を指す。さらに「△」は指導前の「正しかったか違っていたかわからない」の判断を指す。指導後については「△」に該当する回答は選択肢としてもうけていなかったため、指導前の自己評価についてのみ「△」が存在していることとなる。

まず、母音について図4と5に示す。

図4 短母音と長母音の指導前と指導後の自己評価

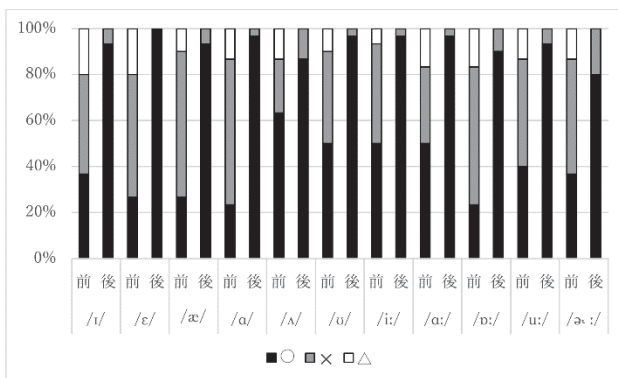
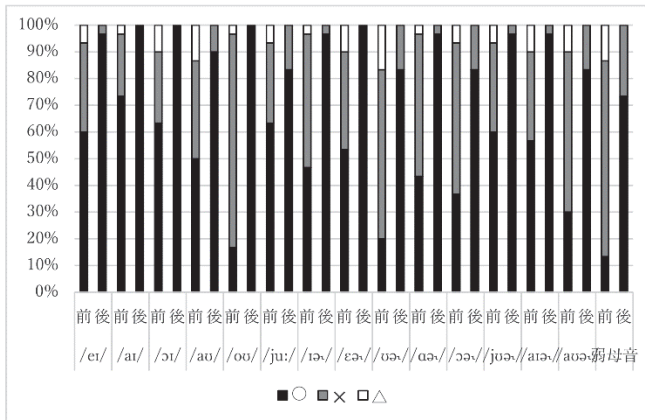


図 4 に示される通り、短母音と長母音に関して「○」の回答率を指導前後で比較すると、指導後にその割合が高くなっていることがわかる。

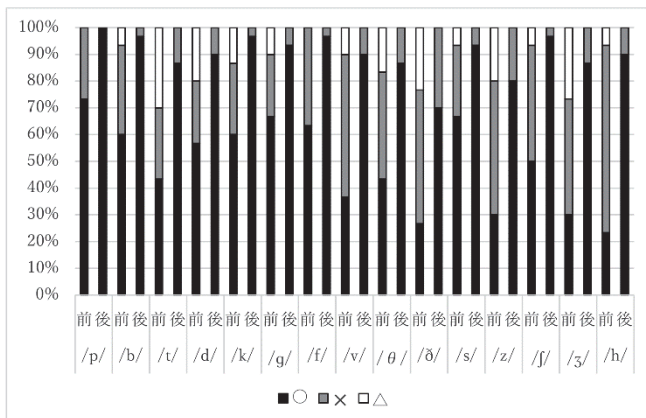
図 5 二重母音と三重母音と弱母音の指導前と指導後の自己評価



二重母音に関しては、指導前の自身の発音が「正しかった」と判断した割合が短母音や長母音に比べて全体的に高いが、/oʊ/と/ɔə/の指導前の割合は他の二重母音に比べて著しく低いことがわかる。/oʊ/に関しては、たとえば *home* や *old* といった単語をカタカナのように発音をして「ホーム」「オールド」など長母音として発音する傾向があったと推測される。長母音ではなく二重母音であったという認識が指導前には欠けていたと思われる。指導後の自己評価を見てみると、/oʊ/については回答者全員が感覚が「つかめた」と答えていた。

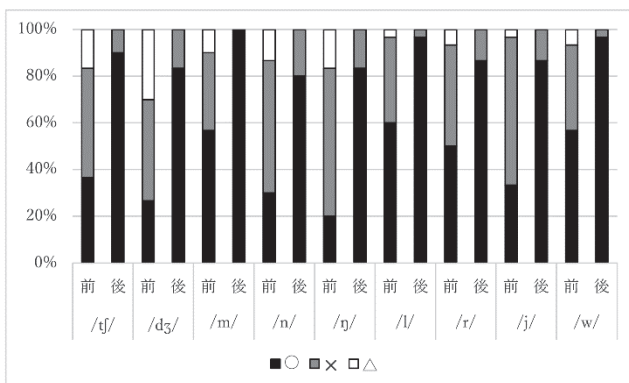
次に、子音についての結果を図 6 と 7 に示す。

図6 閉鎖音と摩擦音の指導前と指導後の自己評価



閉鎖音と摩擦音は、指導前に自分の発音が「正しかった」と判断した人の割合が、母音や他の子音と比べて高かった。

図7 破擦音、鼻音、側面音、半母音の指導前と指導後の自己評価



破擦音や鼻音について、指導前の自分の発音が「正しかった」と答えた人の割合は低かった。日本語母語話者が苦手とされる/l/と/r/については、指導前でも/l/は 6 割近く、/r/は 5 割近くの人が「正しかった」と回答していた。苦手とされる子音でありながら半数以上の人が発音できていたと判断していたこととなる。

5. 個別での発音指導を受けた学生の意識調査

4 つの研究課題のうち、以下に再度示す 3 番目と 4 番目について調査するため、2021 年度前期に担当した「英語オーラルインタープリテーション」における個別指導に関して調査を行った。

3. 英語発音に関する指導を通して、自身の発音に関する弱点を意識できるようになるのか？
4. 意識の変化だけでなく、発音も改善されるのか？

「英語オーラルインタープリテーション」とは英語の朗読に関する授業で、履修者は授業で取り組む作品を学期の初めに各自選択する。作品は、文学作品やノンフィクション、スピーチなど、様々である。1 学期間かけてその作品の朗読に関する個別指導を行い、朗読の技術を高めながら、音声による英語表現力を高めることをねらいとしている。

5. 1. 参加者

2021 年度前期に担当した「英語オーラルインタープリテーション」を履修した学生は 11 名だったが、うち 1 名は家庭で英語を使用しており、もう 1 名は音声データの提出が不完全であったため分析の対象外とした。したがって、9 名が分析対象となった。

さらに、履修者の発音の評価者として、1 名のアメリカ英語ネイティブスピーカーにも参加してもらった。

5. 2. 分析対象材料

この授業では各自が朗読の素材となる作品を選択し、1学期間その作品について朗読練習を行う。文学作品など、長い素材に関しては作品全体の中から数ページを抜粋し、その部分のみ朗読をする。学期の途中に中間発表として、朗読するページ全体のうちの前半の朗読発表をし、学期末に最終発表として選択したページ全体の発表を行った。中間発表の目的は評価ではなく、他の履修者や担当教員である筆者からのフィードバックを受けることであるが、最終発表は評価の対象とした。

また学期末には、発表とは別に期末レポートも課した。期末レポートには、以下のすべての項目を含むよう指示を出した。

1. オーラルインタープリテーションについて自分なりの定義
2. その課題を選んだ理由
3. 練習において注意した点や苦労した点
4. 練習や発表に関する自己評価
5. この授業を通して得たこと

最終発表は練習の成果を示すためのものであるのに対し、期末レポートは練習の過程をまとめることを目的としている。

分析対象として、まず学生が提出したレポートを分析し、個々の学生の英語発音に関する意識の変化を探る。さらに、個別指導開始前と最終発表後の作品の朗読を各自録音して提出してもらい、ネイティブスピーカーの評価を受けた。ネイティブスピーカーによる評価を通して、意識の変化があった場合に発音の変化も起こっているのかを探った。9名のうち参加者Gは、最終発表のスケジュールの調整が必要となったため、提出してもらった指導後の音声は最終発表ではなく中間発表の音声となった。しかし前半部分の指導は中間発表までに完結していたため、指導後の録音とみなすことができると判断した。ネイティブスピーカーによる評価では、各参加者の個別指導前と指導後の録音を聞いてもらい、母音、子音、語強勢、リズム、

イントネーション、全体評価の6項目を1 (Completely nonnative) から6 (Completely native) の6段階で評価してもらった。

5. 3. 結果

まず学生が提出した期末レポートの内容の分析について報告する。表1に、学生が期末レポートに記述した、個別指導を通して自身の英語発音に関して感じた変化を記す。

表1 「英語オーラルインタープリテーション」の期末レポートに見られる英語発音に対する意識の変化についての記述

参加者 ID	記述 (レポートから抜粋)
A	私がどのように英語を発音しているのか知ることができました。今までは英語で伝えることが精一杯で発音を意識したことがありませんでした。英語音声学の授業ではリンキングやイントネーションを学びましたがそこから日常で意識することは多くありませんでした。
B	自身の発音の向上を感じることができました。これまで気にして発音してなかった linking のことや、r の正しい発音の仕方など、より自然な英語の発音に近づけることができたと思います。
C	単語のつながりや、イントネーションは大分磨かれたように感じる。

D 中学生の頃から本格的に英語を学習してきましたが、代名詞を弱く発音するということを学ばずに今まで発音していたので、無意識のうちに代名詞を強く発音してしまいました。しかし練習を重ねていくうちに、自然と代名詞の発音を意識することができたと思います。また、この授業に限らず、他の英語の授業でも、代名詞を弱く発音するように心がけたおかげで、英語を聞き取るときにも、代名詞の発音が気になってしまうほどになりました。

...‘and や had の d は発音しないということ’です。こちらも、この授業に関わらず頻出度が高い単語なので、今後も意識しながら発音するうにしていきます。

E 以前は、上手に読むというのは、発音が綺麗であれば良いと考えていました。ですが、この授業を通して、発音が良いだけでは上手に読めると言うわけではないということがわかりました。読み聞かせるには、リンキング、強弱、高低、ポーズ、速さなど登場人物によって感情を伝えられるように変化させなければいけなく、それらにも気を付けないといけないということを学びました。また、今までは、内容語を強く読み、機能語は弱く読むことを、全てのリーディングで意識していましたが、物語を語る上で、その場面では何を強調したいかによって強く読むところと弱く読むところが変わることを知りました。

F 自然な文章の読み方や、強勢、子音落ちなども練習において課題であった。これらの課題は本作の朗読の際にかなり改善されたと感じているが、実際の会話で使うときにまだまだ意識が甘いと感じている。そのため本講義の枠組みを越えた学習をこれからも継続したい。

G 私は音の高さを変えることがなかなかできず苦労した。

口をしっかりと開けることを意識することで、全体的に発音が上達したことを感じている。

自分の癖として台本に書いていない場所に **the** が入ってしまうことや **among** や **following** などの今まで使ってきたであろう単語の正しい発音への矯正、**r** の発音が入りがちなことなどが挙げられる。

H 次の癖は **r** の発音が入りがちになってしまうことである。先生からの指摘を受け、自分の録音を聞いたことで初めて知った癖であったため驚きがあった。自分にその癖があることを自覚してからの個別指導や練習では驚くほどにその癖が出てしまっていることを体感した。

I この授業を履修した結果、自分の周りの人々の発音がとても気になるようになった。例えば、クラス内のディスカッションにおいてリンキングができるのになと感じたり、ストレスの場所が異なっていたりすると直したくなってしまう。

自身の英語発音の癖の改善など、個別指導を通して英語発音の向上を実感しているようであった。さらに、他学生の英語発音へも注意を向けるようになったなど、授業で得たことをさらに応用させる姿勢も見られた。参加者 E は授業開始時点で英語の母音や子音の発音はほとんど問題がない状態だったため、リズムや間の取り方などを重点的に指導することとなった。

分析対象となった9名のうち、4名は4.1.で述べた2020年度開講の「英語音声学」でのアンケートにも回答をしていた。その4名によるアンケートへの回答で、「英語音声学」履修前後の意識の変化の数値は表2の通りである。

表2 4名による「英語音声学」履修前後の音声に対する意識の変化

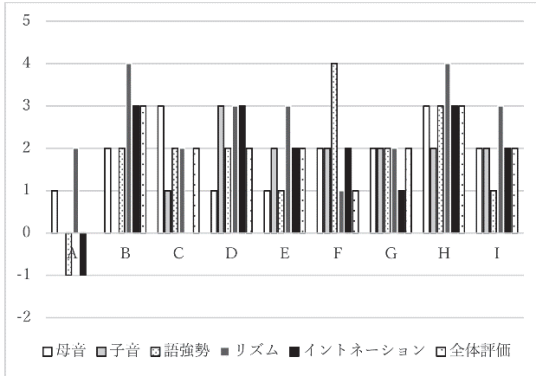
参加者 ID	履修前	履修後
E	3	5
F	5	5
G	1	4
I	3	4

注 1=「まったく意識していなかった」、5=「いつも意識していた」

参加者 F は「英語音声学」の履修前にすでに発音に対する意識が高かったと回答しているが、表 1 にも見られる通り、「英語オーラルインタープリテーション」での個別指導を通して、発音に関して改善すべき点がまだあったことを認識することとなった。

以上のように、個別指導を通して各自が持つ特有の発音の問題点の改善と意識の変化に働きかけることができたが、これらは学生自身の認識にとどまっており、実際に発音の改善に結び付いたか否かは不明である。そのため、ネイティブスピーカーによる評価でそれを判断する。図 8 は、個別指導前と指導後の録音をネイティブスピーカーに評価してもらった際の、指導前から指導後にかけての伸びを示している。数値がマイナスになっているものは、指導前に比べて指導後の評価が下がっていたことを意味する。

図 8 指導前と指導後の録音のネイティブスピーカーによる評価の差



参加者 A を除いて、8 名の発音において、ほとんどの項目で伸びが見られた。参加者 B と H はリズムにおいて、参加者 F は語強勢において他の参加者と比べて突出した伸びが見られた。表 1 からわかる通り、B は **linking** ができるようになったとあり、そのことがリズムの改善につながったと考えられる。また、F については強勢が自身の課題であり、個別指導を通して改善が見られたことを、表 1 にもある通り期末レポートでも述べているため、その変化が実際の発音にも反映されていることがわかる。

6. 考察

ここでは、4 と 5 で述べたそれぞれの結果をもとに、4 つの研究課題について考察する。まず、1 つ目の研究課題である「英語発音に関する指導を受けることで、音声に対する意識が変化するか？」については、「英語音声学」において集団を対象とした英語音声に関する指導を通して、学生の意識の変化が見られた。また、2 つ目の研究課題である「変化する場合、どのような項目に対して変化するか？」については、主に母音と子音に関する指導が「役に立った」と認識されており、具体的

な分析を通してカタカナ表記による影響から正しい発音ができていなかったものなどにおいて、発音の違いを意識できたことがわかった。

さらに、個別指導を行った「英語オーラルインタープリテーション」での学生のレポートと発音を通して3つ目と4つ目の研究課題について探った。3つ目の「英語発音に関する指導を通して、自身の発音に関する弱点を意識できるようになるのか？」については、期末レポートでの記述を見ると弱点を意識し、それを克服すべく練習に励んだ様子がうかがえた。その結果、改善につながったと認識していることがわかった。また、「意識の変化だけでなく、発音も改善されるのか？」という4つ目の研究課題については、ネイティブスピーカーによる評価を通して、実際に改善されたことが確認できた。

これらは、発音に関する自己効力感 (self-efficacy) と実践 (practice) との関連にもつながる。すなわち「できると思う」と「実際にやっている」ことのずれを調べることで、さらなる発音の改善に結び付けることができる。

以上により、英語音声に関する指導を行うことで発音に対する意識を高め、さらに実際の発音の改善にも結び付けることができることが確認された。しかし、発音の改善に結び付けることが確認できたのは個別指導を通してであり、集団指導を通して実際の改善に結びつけられるか否かは不明である。個別指導は時間も労力も要するため、1人でも多くの学習者の発音の改善を目指すための方法を見出す必要性は依然としてある。

7. 結論

本研究では、筆者が担当する2つの英語音声に関する授業を通して、学生の英語発音に対する意識の変化を調べた。外国語を専門とする大学における調査であるため、参加した学生の多くが英語発音をよくしたいという思いは比較的高めであったと推測できるが、よくするために行動していたかどうかは切り離して考えなくては

いけない。英語教育においてオーラルコミュニケーションスキルの重要性が増す中で、スピーキングとリスニングに影響を与える発音に関してさらに指導を充実させることが必要となる。

参考文献

- 大塚朝美、上田洋子（2012）「中学・高校での発音学習履歴と定着度：大学1年生へのチェックシートと質問紙が示唆するもの」『大阪女学院大学紀要』第8号，1-27.
- 小野浩司（2012）「日本人英語：英語発音の実態とその矯正法」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第17集第1号，57-78.
- 木澤利英子（2013）「明示的発音指導が中学生の英語学習に与える影響：音声スキルおよび英単語学習方略に着目して」『関東甲信越英語教育学会誌』第27巻，99-112.
https://doi.org/10.20806/katejournal.27.0_99
- 小菅和也（2005）「基本的な指導法に新しい工夫を加えて」『英語教育』第54巻第10号，10-13.
- 篠崎文哉（2015）「日本人が目指すべき発音とは：中学生を対象としたアンケート結果から」『日本国際教養学会論集』第1号，62-72.
- 竹林滋、斎藤弘子（2008）『新装版 英語音声学入門 CD付き』大修館書店
- 中西のりこ（2008）「英語発音学習に対する学生の意欲と動機付け」関西国際大学コミュニケーション研究所『コミュニケーション研究叢書』第6集，49-57.
- 牧野眞貴（2013）「学生が効果的に感じる英語発音トレーニングの実践報告」『関西大学外国語教育フォーラム』第12号，121-134.
- 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説：外国語編』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_010.pdf

柳田綾（2019）「英語音声学授業における発音指導の実践報告：楽しく効果的な発音指導法とは」『中部地区英語教育学会紀要』第 48 巻， 221-228.

https://doi.org/10.20713/celes.48.0_221

渡邊勝仁（2018）「日本人大学生英語学習者への授業内発音指導に関するアンケート調査の分析」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』第 67 号， 135-140.

Gass, S. M., Behney, J., & Plonsky, L. (2013). *Second language acquisition: An introductory course* (4th ed.). New York: Routledge.

資料

2020年度の集団指導調査で使用したアンケートの質問項目

質問項目	回答方法
1. 大学に入学する前（中学校や高校など）に、英語発音に関する指導を受けたことがありますか？	「はい」あるいは「いいえ」
1-2. 上記「1」で「はい」と答えた方は、どこで受けましたか？（例：高校で）	自由記述
1-3. 上記「1」で「はい」と答えた方は、どのような内容の指導を受けましたか？（例：IPA（発音記号）の読み方、強勢の位置）	自由記述
2. 大学に入学後、「英語音声学」の授業以外のところで英語発音に関する指導を受けたことがありますか？	「はい」あるいは「いいえ」
2-2. 上記「2」で「はい」と答えた方は、どこで受けましたか？（例：Freshman English で；SALC で）	自由記述
2-3. 上記「2」で「はい」と答えた方は、どのような内容の指導を受けましたか？（例：IPA（発音記号）の読み方、強勢の位置）	自由記述
3. 「英語音声学」を履修する前のあなたの英語発音に対する意識はどの程度でしたか？	1～5 のリッカート尺度 (1=まったく意識していなかった、5=いつも意識していた)

質問項目	回答方法
4. 今学期「英語音声学」を受講して、現在のあなたの英語発音に対する意識はどの程度ですか？	1～5 のリッカート尺度 (1=まったく意識していない、5=いつも意識している)
5. 少しでも意識に変化があった場合、授業のどのような活動がその変化をもたらしたと思いますか？あてはまるものをすべて選んで下さい。	選択式
6. 授業で扱ったトピックで役に立ったと思うものをすべて選んで下さい。	選択式
7. 授業で扱ったトピックで役に立たなかったと思うものをすべて選んで下さい。	選択式

謝辞

本研究は神田外語大学言語教育研究所の研究助成金により行われた。言語教育研究所に御礼を申し上げる。